（社会調査実践演習　サンプル論文）[1)]

第 13 章

休日だけ料理をする夫たち

―文化資本としての「男の料理」―

データサイエンス学部　講師　伊達平和

１．問題の所在

現代の日本では男女の平等は政策的な課題となっており、メディアでは「ジェンダー平等」や「男女共同参画」、さらには「すべての女性が輝く社会の実現」といった言葉を目にする機会も増えている。このようなジェンダー平等政策は、国際的には 1979 年の女子差別撤廃条約、そして国内的には 1985 年の男女雇用機会均等法として制度化され、職場における女性差別の是正、家庭での家事分担の平等化、そして男性による育児参加の推進などが目指されている。しかしこのように、ジェンダー平等に関する言葉や制度があるということは、日本がジェンダー平等を達成できていないということを逆説的に示しているともいえる。例えば、ジェンダー平等に関する国際的な指標にジェンダー・ギャップ指数　(GGI: Gender Gap Index)があるが、2015 年時点で GGI が 144 カ国中 111 位となり、非常に低い順位となっている。一方で、総合的な人間開発の指標である人間開発指数(HDI: Human Development Index)は 188 カ国中 17 位であり、日本は健康や教育水準、経済開発については十分に発展しているものの、政治・経済活動に参加する機会の男女間格差は大きいことが指摘されている（内閣府編 2017)。

このようなジェンダー間の不平等は、労働市場などの公的領域から家族生活の私的領域まで幅広いが、炊事・洗濯・掃除に代表される家事分担の不平等については、家族社会学の中心的な研究対象であった。これまで多くの研究が、夫婦の家事分担の規定要因について分析を行い、家事が妻に偏って配分されていることを指摘してきた。近年では、家事や育児に積極的な夫を「イクメン」と呼ぶなど、共働き家庭の増加と相まって、男性の家事・育児参加は年々求められている。

ジェンダー平等時代の要請に対応し、夫の家事参加の分析は比較的厚い蓄積がある（乾(2014)など)。しかし、そのほとんどの研究は夫の家事の量的な側面に着目し、平日の家事と休日の家事といった質的な側面に着目した研究は乏しい（鈴木 2011)。また家事の中でも料理は、「男の料理」といわれるように、ほかの家事に比べて男性がやる場合は「手が込んでいる」「こだわりがある」といった特別なイメージと結びついている。この「男の料理」は比較的精神的にも時間的にも余裕がある休日に行われることが多いと考えられるため、家事の質的な側面に着目する本稿で取り上げるにふさわしい分析対象である。

以上をふまえ、本稿では、夫の料理行動について平日と休日の質的な違いを考慮したう

えで、とくに「休日しか料理を行わない夫の特徴」を明らかにすることを目的とする。続く第２節では先行研究を整理し、本稿で分析をする仮説を構築する。第３節では使用するデータと変数を概観し第４節で分析結果を報告する。最後に第５節で分析結果から考察を行う。

２．先行研究と仮説

２―１．先行研究の整理と批判的検討

夫の家事行動に関する先行研究と仮説は国内外で非常に多く蓄積されている。研究を整理した乾(2014)によると、①ニーズ仮説(家事のニーズが高いほど家事頻度が増加する)、②代替資源仮説(世帯内で家事をしてくれる人がいれば家事頻度が減る)、③相対的資源仮説(学歴・収入などの資源が高いほど家事を行わない)、④時間的余裕仮説(時間に余裕があれば家事を行う)、⑤ジェンダーイデオロギー仮説(平等主義的であれば夫は家事をする)、⑥情緒関係仮説(夫婦の情緒関係が強まるほど夫は家事をする)、といった仮説が検討されてきた。

以上で示した仮説は、そのほとんどが家事頻度や家事時間という家事の量的な側面に適用されている。一方先述したように、夫の家事は量的な側面だけでなく、平日は料理をしないが休日は家事をするといったような質的な差異もある。しかし、家事の質的な側面について分析しているものは乏しく、今後の課題となっている。

家事の「平日」と「休日」の質的な差異に着目した数少ない研究に鈴木(2011)がある。鈴木は平日を「待ったなしの家事」、休日の家事を「延期可能な家事」と質的に異なるものとして区別し、さらにそれぞれについて遂行・非遂行の組み合わせによって全日型・平日型・休日型・無関与型の関与パターンに分類し、その規定要因を明らかにした。鈴木は、ライフステージ(末子が小学生か中学生以上か)、夫学歴、夫の働き方、妻の働き方によって、夫の家事関与パターンが異なることを明らかにし、具体的には末子が中学生以上であれば、休日型や無関与型になりやすい。高学歴であれば休日型になりやすい、といった結果が得られている。しかし、鈴木の検討結果については、クロス表分析などの記述的な分析にとどまっており、結局どのような要因がこの質的な差を生み出しているのか、多変量解析の結果が示されていないことから、まだ研究は萌芽的な段階といえる。

さらに、鈴木はすべての家事について合計した時間を使っており、細かい家事の項目について明らかになっていない。家事は料理、掃除、洗濯など様々なものがあるが、特に料理は「男の料理」というように、「男の」という形容で差別化がなされている(つまり「男の掃除」「男の洗濯」という言葉は一般的ではない)。この「男の料理」は、一般的にはローストビーフやスパイスカレーなど「手が込ん」でおり「こだわり」が詰まった平日では作ることのできない料理があげられるが、平日に料理をしておらず、休日に料理をするような男性がどのような男性なのか、明らかにした研究は乏しい。

２－２．文化資本としての「男の料理」

それでは、休日に「男の料理」をする人はどのような人だろうか。人々のライフスタイルについての研究の蓄積は厚いが、人々のライフスタイルは学歴、年齢、職業といったそ

の人の属性によって異なることが指摘されてきた（小林 2017)。特に学歴は、学歴取得後の職業や収入に影響するのはもちろんのこと、学歴取得の過程で社会的に高いステータスの象徴となる文化的態度を身につけるとされている。例えば低学歴の人々に比べて高学歴の人々はクラッシック音楽、美食、読書や美術鑑賞といった文化を消費する傾向が指摘されている（Bourdieu 1979=1989)。このようないわゆる「高級文化」を消費する行動や態度は「文化資本」と呼ばれ、社会的な階層が再生産される媒介要因の一つとして多くの研究が進められている（片岡 2019 など多数)。このことを敷衍して考えると、普段は料理をしないが、ローストビーフやスパイスカレーなど、休日に手の込んだ料理を行うという「男の料理」に対する行動も、文化資本として高学歴者が行っている習慣である可能性がある。

ただし、休日の「男の料理」が文化資本ないし高級文化として日本社会の中で考えることができるかどうか、検討の余地がある。この点について片岡(2019)は、神戸市の 20-69 歳の男女 535 名のデータから文化的活動の威信評価を行っている。文化的活動の威信スコア[2)]は全部で 41 項目の文化的活動についてそれぞれ 100 点から 0 点まで 25 点刻みで数値化され、その平均値によって算出されている。この文化威信スコアには「料理」という項目はないものの、「パン作りや菓子作り」があり、全体では 41 項目中 15 位と、中の上（あるいは上の下）程度の文化活動であることが分かる。ここで「パン作りや菓子作り」は明らかに日常的な料理よりも時間がかかる凝った料理であることから、男性にとって「休日に料理をする」という行為との類似性が指摘できるだろう[3)]。よって、男性の休日に料理をする「男の料理」は、クラッシック音楽鑑賞のレベルで「高級文化」とはいいがたいかもしれないが、ある一定の文化的地位を占めていると考えられる。つまり、学歴と「男の料理」は文化資本論から考えると関連している可能性が高い。

２－３．仮説と分析方法

以上をふまえて、本稿では「学歴が高い夫ほど「休日型」の料理（＝男の料理）を行う」という仮説を検討する。仮説を検討するにあたり、まず学歴と家事の関与パターンとの２変数の関連をクロス表によって検討する。しかし、今回の仮説を検討するには、学歴と家事行動との関連を見るだけでは不十分である。なぜなら、学歴は職業と関連し、職業は収入と関連し、それらの要素は家事行動とも関連していると想定されるためである。つまり、文化資本としての学歴の効果は、先述した時間的な制約や資源といったその他の仮説では説明できない効果として検証する必要がある。よって、２変数の関連だけでなく、本人や配偶者の労働時間や収入を統制した多変量解析によって学歴の効果がなお有意であるか検討する。

３．データと使用する変数

３－１．使用するデータ

使用するデータには、「大津市男女共同参画及び女性活躍に関する調査」（以下大津市調査と表記）を使う。調査の概要を表１に示す。このデータは大津市に限定しているものの、平日と休日の家事について尋ねていること、また家事の細目についても８項目尋ねていることから、本課題を行う上で適切なデータである。なお共働き世帯の男性の回答者に限定

して分析をおこなう。

表１．調査概要

調査名	大津市男女共同参画及び女性活躍に関する調査
調査対象	大津市に在住している30歳～49歳の有配偶男女
調査時期	2019年9月14日～9月30日
調査方法	郵送法
抽出方法	住民基本台帳から無作為抽出
計画標本	4000
サンプルサイズ	1969
回収率	49.2%

３－２．使用する変数

従属変数には「本人の料理時間」を使用する。「大津市調査」では、本人の家事時間と配偶者の家事時間を８項目について平日と休日の分数を尋ねている。この中から「A 食事の用意」を使用する。本稿では料理関与パターンについて平日・休日ともに５分以下であれば「無関与型」、平日５分以下かつ休日に料理をしていれば「休日型」、休日５分以下かつ平日に料理をしていれば「平日型」、平日も休日も料理をしていれば「全日型」として４つのパターンに分類する。ただし、「平日型」は極めて出現率が少なかったため、欠損値として分析から除外した。

表２．使用する変数の記述統計量

	男性（n=476）	
変数	*Mean*（%）	*SD*
従属変数		
料理関与パターン		
無関与型	40.5	
休日型	27.1	
全日型	32.4	
独立変数		
学歴		
高卒以下（%）	18.7	
短大・高専・専門（%）	18.9	
大学以上（%）	62.4	
統制変数		
年齢	41.7	5.1
本人年収（万円）		
0～200万未満	14.3	
200～600万未満	59.0	
600万以上	22.5	
無回答・わからない	4.2	
配偶者年収（万円）		
0～100万未満	34.9	
100～400万未満	39.1	
400万以上	19.1	
無回答・わからない	6.9	
本人月労働時間	49.8	11.5
配偶者月労働時間	31.4	13.3

独立変数には本人学歴を使用する。本人学歴は６段階で尋ねられているが、高校以下／短大・高専／大卒以上の３カテゴリに統合した。統制変数として年齢（連続量）、本人月当

たり労働時間（連続量）、配偶者月当たり労働時間（連続量）、本人年収（４カテゴリ）、配偶者年収（４カテゴリ）を使用した。本人年収と配偶者年収については性別を考慮してカテゴリの分け方を変えている。なお欠損値のある回答者は分析から除外し、最終的に欠損値のない 440 名を使用した[4)]。

表２に使用する変数の記述統計量を示す。この表によると、料理関与パターンはすべての型について一定数存在しており、女性のほぼ全てが全日型（データの詳細は省略）であることをふまえるならば、男性の家事パターンには平日・休日という質的な区別があることが確認できる。

４．分析

４－１．基礎的な分析

まず基礎的な分析として、学歴別の料理関与パターンについてクロス集計をしたものを図１に示す。クロス集計の結果、学歴によって料理関与パターンには差があることが示された（χ^2=11.421, df=4, p<0.05）。具体的には、高卒以下の夫で最も無関与型が多く、学歴が大卒以上である場合に休日型が多い。一方全日型についてはどの学歴においても３割程度であり、学歴による差が小さい。

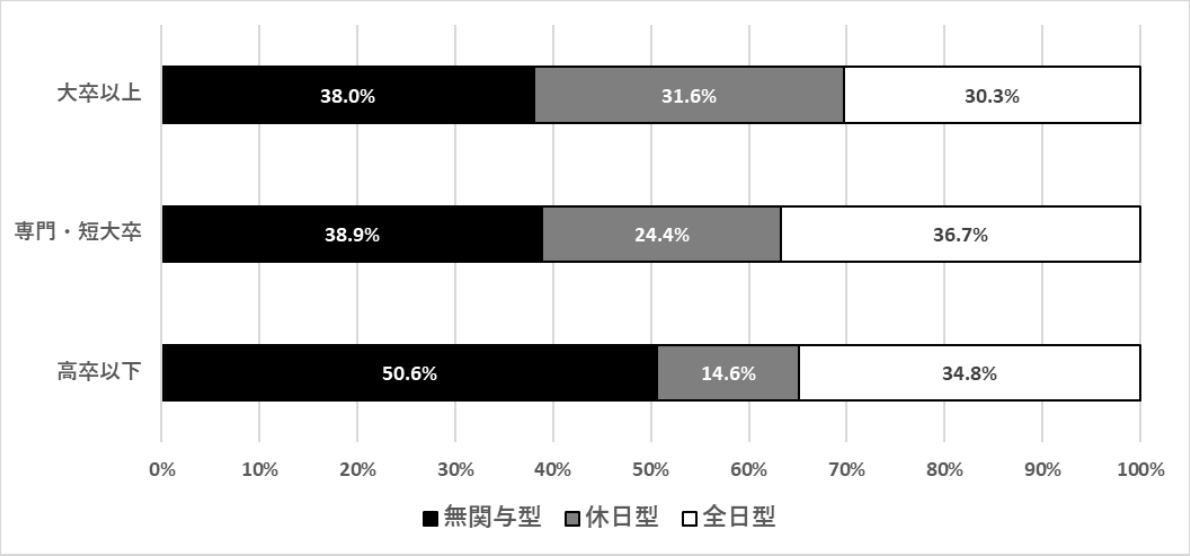

図１．　本人学歴別の料理関与パターン

この単純集計の結果からは大卒者は休日に家事を行うことが示唆されているが、学歴の料理関与パターンに対する効果は年齢や働き方といった別の変数と交絡している可能性がある。よって、次節では多変量解析によってこれらの変数を統制した上でも、学歴と料理関与パターンの関連がみられるか確認する。

４－２．多変量解析

本節では、学歴の効果が他の変数を統制しても影響があるか、多変量解析によって検討する。表３は無関与型を参照カテゴリとしたときの休日型と全日型の規定要因について分

析した、多項ロジスティック回帰分析の結果である。この表によると、クロス集計で確認した通り、高卒以下の回答者と比べると短大・高専・専門卒と大卒以上では無関与型に比べると休日型になりやすい。ただし短大・高専・専門では有意確率は 10%水準であり、有意傾向に留まるが、大卒以上では１%水準で関連がある。一方全日型については学歴との関連がないようだ。

全日型については学歴との関連は認められなかったが、統制変数に使用した変数が関連しており、妻の年収が高いほど、また妻の労働時間が長いほど全日型になる可能性が高まる。一方、本人の労働時間が長いほど、また年収が中程度（200 万～600 万）であると全日型になる可能性が下がる。

以上の結果より、無関与型と全日型を隔てる要素としては働き方や年収といった、時間的な成約や夫と妻の金銭的な資源によるが、休日型と無関与型を隔てる要素としては、収入や働き方に還元されない学歴が影響を及ぼしていることが明らかとなり、仮説どおりの結果が得られた。この結果を踏まえて次節では考察を行う。

表３．多項ロジスティック回帰分析の結果

	休日型（vs無関与型）			全日型（vs無関与型）		
変数	*B*	*Exp(B)*		*B*	*Exp(B)*	
切片	0.431			2.561		*
高卒以下(ref.)						
短大・高専・専門	0.727	2.070	+	0.157	1.170	
大学以上	1.025	2.788	**	-0.068	0.934	
年齢	-0.016	0.985		-0.033	0.968	
本人年収（万円）						
0～200万未満(ref.)						
200～600万未満	-0.671	0.511	+	-0.917	0.400	**
600万以上	-0.244	0.784		-0.655	0.519	
無回答・わからない	-0.331	0.718		-0.680	0.507	
配偶者年収（万円）						
0～100万未満(ref.)						
100～400万未満	-0.104	0.901		0.224	1.251	
400万以上	0.089	1.093		0.940	2.559	*
無回答・わからない	0.261	1.298		0.768	2.156	
本人月労働時間	-0.010	0.990		-0.039	0.962	**
配偶者月労働時間	0.000	1.000		0.026	1.026	*
n			476			
Nagalkerke R2			0.165			
Cox and Snell R2			0.146			

Note. +p< .10 *p < .05 **p < .01 ***p < .001

５．考察

本稿では共働き夫婦の夫の家事について、特に「休日」型の料理を「男の料理」として

位置づけた。分析の結果、「男の料理」をするのは大卒以上層であることが明らかとなった。これは、本人や配偶者の労働時間や年収とは独立して効果を持っていることから、「大卒」によって身についた文化資本による行動である可能性がある。この点について、いくつかの解釈ができる。例えば、高学歴者は「バーベキューで料理をする」、「パーティー料理を作る」といった機会や、時間や知識が必要な「魚をさばく」、「手の込んだ料理をする」といったような機会が多い、あるいはそのことがハイカルチャーの人々の人間関係の間で差異化戦略として働いているのかもしれない。

ただし、一般的に高学歴の人々は低学歴の人に比べて、性役割意識が平等主義的であるという報告もあり、男性の平等主義的な性役割意識は家事行動に影響しているという指摘もあることから、イデオロギー仮説による媒介がある可能性も否定できない。このデータでは一般的な性役割意識を収集していないことから検討が困難であるが、この可能性は今後の検討課題とする。

次に、全日型と無関与型を分ける特徴は、文化資本ではなく、本人や配偶者の資源と時間の制約であるという知見も得られた。この点について先行研究による仮説が再確認されたということになるが、本稿において重要なのは、休日型と無関与型を分ける論理として既存の仮説がほとんど当てはまらなかったという点である。このことは休日型と前日型には明らかな質的な差異があること、そして分離して考察することの重要性を示唆しているといえよう。

最後に、残された課題について３点指摘する。まず１点目は従属変数のパターンについて、今回は５分未満を「していない」と解釈したが、例えば即席麺やレトルト食品を作ることも料理と捉える人もいるだろうし、そのような料理は５分未満で行うことが可能である。共働き世帯が増加していくトレンドの中で、このような短時間の料理についても加味する必要である。

２点目に細かい家事の分析可能性についてである。本稿では料理についてのみの分析となっている。今回使用したデータには８つの家事・育児に関する細目が分析可能である。家事種目ごとの差異について今後検討する必要がある。

３点目に使用したデータの制約である。今回は大津市のデータを使用したため、今回の結果は大津市に限定的な結果かもしれない。全国サンプルを使用した分析を行うことによって、日本社会全体について議論することができるだろう。

６．むすび

共働きが一般的となる中で、男女共同参画の視点からはますます夫の家事参加、そして夫が家事参加できる環境づくりが必要とされている。本稿の結果から政策へのインプリケーションを引き出すとすれば、夫による「全日型」の家事の比率を上げるには、長時間労働の是正や男女の賃金格差の是正ということになるだろう。「休日型」については、仮に本論の解釈が正しいとすれば、高学歴層に対して、「男の料理教室」などで情報発信をしていくことで、料理人口を増やすことが可能かもしれない。もちろん、この「休日型」に関しては、「それでは焼け石に水である」という反論も考えられるが、ジェンダーギャップが著しい日本では、一気に家庭内のジェンダーギャップを解消していくことは難しい。少しず

つであっても、ジェンダーギャップを解消していくような施策には意味があると考えられる。男女共同参画について、課題は山積されているが、一歩ずつでも進めていく努力をしなければならないだろう。

注

1) 本論文は 2019 年度「社会調査実践演習」の参考論文として、学生が作成する論文について「形式の見本」として書かれたものである。レビューを含めて精緻な学術的な議論については課題が多く残されている。
2) 参考までに文化威信スコアの１位は「美術館で映画を鑑賞する」、２位は「クラッシックコンサートへ行く」、３位は「社会福祉活動をする」、３９位は「マージャンをする」、４０位は「パチンコをする」、４１位は「競馬、競輪、競艇をする」となっている。
3) 本来ならこの点は丁寧に検討するべきである。例えば筆者はホームベーカリーでパンを作ることがあるが、これは炊飯感覚で出来るので凝っていない料理と考える立場もある。インドカレーもしばらく作っていたが、スパイスの調合さえ慣れれば長時間かからないので、要は料理の手間は経験や器具、技術によって異なるので、一概に言えない可能性がある。
4) 本人年収と配偶者年収については、無回答・わからないを１つのカテゴリにしたので、欠損値も含めて分析をしている。

参考文献

Bourdieu, Pierre,1979, *La Distinction: Critique Sociale du jugement, Paris: Éditions de Minuit*.＝1989　石井 洋二郎 訳　『ディスタンクシオン――社会的判断力批判１』, 藤原書店.

乾順子, 2014,「既婚女性からいた夫婦の家事分担―家事分担の平等化過程における規定構造の変化」『ソシオロジ』59(2):39-54.

片岡栄美, 2019, 『趣味の社会学』青弓社.

小林盾・編, 2017, 『ライフスタイルの社会学―データから見る日本社会の多様な格差』東京大学出版会.

内閣府編, 2017, 『男女共同参画白書（平成 29 年度版)』内閣府.

鈴木富美子, 2011,「休日における家事・育児への関与は平日の『埋め合わせ』になるのか―妻の就業形態、ライフステージ、生活時間に着目して」『家計経済研究』.